◆優　秀　賞◆

助け合いの温かみ

中原中学校　三年
天野　夏希

習い事の帰り、私はバスで帰ることになった。バス停は、バスの近くにあり、人通りも多い場所だったため前にも二、三人程度並んでいた。バスを待っていると、向こうの方から白と赤の杖で黄色の点字ブロックをなぞりながら歩いてくる男性がいた。その男性は、私の後ろにぴったりと並んだ。私は、それを見て「この人は完全に目が見えていないわけではないのかな」と思っていた。

バスがバス停に止まった時の事だった。前に並んでいた人から順にバスに乗っていく。私もその後に続いて乗った。しかし、後ろに並んでいた男性は、なかなか乗らずに乗り口のまわりをよろよろと歩いている。その様子は、誰が見ても困っているように見えた。私は、何をしたら良いのか分からず、その男性をバスの中から眺めることしかできなかった。

すると、男性の後ろに並んでいた女性がその男性に、

「大丈夫ですか。〇〇行きのバスですが、乗るのをお手伝いしましょうか。」

と丁寧に声をかけていた。そして、男性は女性の手を借りながらバスに乗りこんだ。その女性は、バスの段差をのぼるときもかけ声で上手に段差をのぼった。バスに乗りこんだ後も、座っていた他の客に声をかけ、男性がいすに座れるまで付き添っていた。私は、その女性の行動を見たとき、かっこいいなという感動と同時に何もできなかった自分に対しはっとした。

小学生の時、私は忘れ物をしがちだった。

筆箱を忘れた日の事だった。筆箱を忘れたらノートを書くことができない。どうしようと困っていると周りの友達が私のことを見て「もしかして、筆箱忘れちゃった？私ので良ければ貸すよ。」と嫌な顔一つせず貸してくれた。

また、給食当番の時にマスクを忘れてしまった時には、

「私、予備持っているから一枚あげる。」

と言ってマスクをくれたり、エプロンを忘れてしまった時には、

「スープは私がやるから、箸おねがいね。」

と当番を代わってくれる子もいた。私が困っている時は、周りの子は私を助けてくれた。

私は、バスでの出来事を思い返した。何か自分にもできることがあったのではないか。男性が困っている時に助けたのは、あの女性一人だけだった。しかし、私が困っていた時には一人だけではなく、沢山の友達が助けてくれた。もし、バスに乗った時、あの女性がいなかったら男性はどうなっていたのだろう。

私は、バスで見た女性の行動と自分を助けてくれた周りの人から、助けることの大切さを深く感じた。そして、「助け合い」とは助けてくれた時に感じる温かみから助けられた人は誰かを助けようと思える。それがつながっているからこそ成り立っていると考えた。